

晴浴雨浴日記

種村季弘



河出書房新社

版元 河出書房新社

晴浴雨浴日記

種村季弘





晴浴雨浴日記

1989年3月20日一初版印刷

1989年3月28日一初版発行

著者—種村季弘

*

装画・挿画—井上洋介

装本—井上洋介・土井章史

発行者—清水勝

発行所—株式会社河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話—03-404-1201 営業—03-404-8611編集

振替口座(東京)0-10802

*

印刷—東洋印刷

製本—小泉製本

©1989 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-309-00554-3

晴浴雨浴日記●目次



裏側からの旅

11

天谷温泉は実在したか

14

今宵かぎりは

17

肘折温泉逆進化論

21

サンデー毎日出勤簿

26

温泉経営のまぼろし

32

霊泉まゝねの湯

37

バーデンバーデンの湯呑

42

湯治場とふんどし

46



2

キノコ党銘々伝 53

四月の魚大漁記 58

ハンブンジャクを待ちながら 63

晴浴雨浴日記 68

3

賈作・東海道中膝栗毛 99

「海上の道」への道 112

酸素溶接のポスト・モダン——西日光耕三寺のこと——

ハリボテ礼讃——大阪ミナミ、町ある記—— 125

逃走犯の小旅行 133

121



熱海秘湯群漫遊記

139

フリーク VS. ハードボイルド道中記——日田・南阿蘇の旅——

149

もみじ狩り落後記

162

昭和雑兵入湯記——会津東山温泉——

171

生きている——南薩・沖繩陶器と湯の旅——

177

教養三日論者

193

新宿の王家の谷

198

風紋の神武たち

202

東京三時間失踪術

206

芝愛宕山きのう今日

211



たった一人の名店街

214

美術館・我流編集術

217

浅 草

221

浅草のレトリック

225

ガードのある風景

233

王様のクレヨンの向こう側

238

あとかき

240

初出一覧

242

温泉索引

246





晴浴雨浴日記









裏側からの旅

東海道線で東京から二時間かかる町にきてから五年になる。ここから東京に出てゆくので、近くの温泉町に東京方面から来る人たちと往き還りが逆になる。そこで、そういう人たちの旅の時間を逆に、あるいは裏側からながめる機会がふえた。

中高年のご婦人グループが圧倒的に多い。それが、列車内に席を占めると途端に半世紀ほど年齢が退行する。女学生の修学旅行くらいの気分になって、まずは幕の内弁当、缶ビール、ジュース類の応酬がひとしきりあり、座がややダレ気味になると今度は一対一で額をつき合わせるペアがあちこちに見える。

これは、嫁の好悪や、最後まで残った息子の進学問題についての深刻な身の上話であるらしい。どうかすとはぐれオオカミのようなものもある。嫁もいなければ落ちこぼれ息子もない、天上天下唯我独尊の怖いものなしである。その、かなりきこしめしたのが一匹、ふらふらとこちらの客



席にわり込んできて、

「たばこ売ってないかなあ」

「L特急じゃないからそんなもの、売りにこないよ」

「たばこ吸いたいなあ」

要するにおねだりである。私はちょうどマイルドセブンを吸いかけているが、ブンと横を向いて知らぬふりをする。

向かいの六十がらみの、こちらはこつこつ勤めあげて退職生活に入っらしい男の人が、いまいましそうにロングピースを差し出した。ついでにライター。

敵はプカリとうまそうに吸って、

「あたし毎日温泉行くんだ。ウチにいてとうちゃんの顔見るのイヤだね。だから毎日あちこち温泉に行ってるの。ホントだよ」

「今日は熱海かい」

と、これは、その顔を見るのもいやがられている「とうちゃん」の年配のロングピース。

「熱海？ あんなもんあんた、あたしのシマだよ。あたしの名前言ってごらん。飲み屋で知らないお店ないから」

マイルドセブンをあげなかったのは正解だったな、と私は思う。はぐれオオカミの盛大な武勇伝を聞かされているうちにロングピースはしだいに気難しげな顔になり、しまいにはほとんど陰悪といていい表情になって黙りこんだ。

「あっ平塚だ」

女が叫んで、バタバタとドアの方へかけ出していった。

ロングピースはとみれば、これははげしい性交を終えたあとの雄カマキリのように、精も根も尽きはててぐったりと座席に沈んでいる。

天谷温泉は実在したか



天谷温泉に予約電話をかけると、

「どっか悪いところがあるんかね」

と電話口の向こうがいった。福井弁の、声の調子では七十がらみらしいお婆さんである。

「悪いって、身体ならどこも悪くないけど」

「そんならどうして来るだ。食べるものもロクなものはないねえだに」

来てもらっても困る、というより、来てもらっては困る、とも受けとれかねない口調だ。

それでもお婆さんは、しぶしぶ一行三人の宿泊を承諾してくれた。三人というのは、マックス・ブランク研究所から東大駒場に来ている哲学者のエンゲルハルト・ヴァイグルさん、彼の同僚の池田信雄さん、それに私である。

前夜は鯖江神明町の国民宿舎神明園に泊まった。越前焼の窯場を見学してから織田町に着いたの